

## クウェート政府奨学金

### 2007年—2008年度留学生

#### クウェートでの使用言語

立命館大学国際関係学部 五所 あゆみ

アラビア語留学という名目でやって来たクウェート。それ以前にアラビア語を勉強した事がほとんどなく、文字を読むのがやっとの状態での留学に、渡航以前から期待と共に現地での勉強や日常生活に不安を感じていた。それ以前、自分自身が生活した英語圏の国々での生活では、ほぼ100%毎日その国の公用語に囲まれながら、いわばスパルタな環境の中で他言語に触れ続け、日本で蓄えた知識に加えて耳と目、体全体で言語を吸収していたように思う。しかし、基礎の土台すら自分の中になかったアラビア語を公用語とする国で、はたして生きていけるのか……この答えは渡航前に考えても全く見つからなかった。

こうして始まったクウェート生活だが、渡航直後はどうしてもアラビア語がわからないという事で己に妥協して英語を使わざるを得ない状況だった。驚いたことに、寮から学校、スーパーにモールにモスクまで、どこへ行っても老若男女、国籍を問わず大半の人が英語を話すことができる。道路標識などにしてもアラビア語と英語の併記、時には英語のみの場合もたくさんある。もちろん、街行く人々や風景を見渡せば自分はアラブにいるんだと感じられるが、それもスークやモスク周辺へ行っただけの範囲である。近代的なモールでは外資系のショップが軒を連ね、サービスはほぼ全て英語で行われる。まるで以前自分が住んでいた国の中で外国人の多いエリアにいるような錯覚に陥ってしまい、クウェートにいる事を容易に忘れてしまう。こうして、渡航前は生活に不安があったが、英語が大いに通じるお陰で情報収集も簡単にでき、特に問題なくスムーズに順応してしまった。

しかし、時が経ち学校での勉強を通じてアラビア語が少しずつ理解できるようになり、実生活で使ってみたく思うようになったとき、1つの疑問が自分の中で生まれた。いつどこでアラビア語を使えばいいのか、である。例えば、私は初級クラスからアラビア語の勉強を始め、授業では日常アラビア語を勉強した。しかし、それを実践しようと思っても公共の場にはアラビア語がわからない外国人が多く、結局英語を話さないといけなかった。また、流暢な英語を話すクウェート人やアラビア語のネイティブも非常に多く、私のために会話を全て英語に切り替えてくれたり、後で英訳してくれたりする。確かに英語が通じるために、これまで多くのクウェートやその他アラビア語圏、さらには欧米やアジアからの女性と知り合いとなったり、勉強会などに参加することでディスカッションや意見交換の機会を持つことができた。クウェートにいるからこそ触れられる知識と経験という観点では非常に多くのチャンスに恵まれ、これも留学生活における醍醐味の一つだと感じている。しかし、そこで使用されるのはいつも英語であり、気づいてみればプライベートの時間にはアラビア語をほとんど使っていないという環境になって

いた。確かに、自らの アラビア語のレベルで何かを学んで深い知識を得るとするのは不可能に近いものがあるが、英語ではそのチャンスが非常に多くなる。しかし、このように英語に頼り続けていると、留学生活の中で何か大事なものを欠いてしまうのではないかと感じるようになった。

5ヶ月ほどのクウェート生活を通じて気づいたのは、クウェートは公用語がアラビア語でありながらも、個人の選びによってはアラビア語を一切使わず生活できてしまう特殊な国であるということだ。その背景は複雑で、クウェート人が人口全体の約40%しかおらず、アラビア語を母国語としない 出稼ぎ労働者が非常に多いこと、そして多くの人々がブリティッシュやアメリカンスクールまたは海外で教育を受けていることなどが、一つの社会の中でアラビア語と英語という主に2つの言語が使用され、その中で両言語を臨機応変に使用する人もいれば片方しかわからない人、時に両言語ともあまり理解できない人などが混在する状態を生み出しているように見える。そのような社会の中で、自分がどこに帰属してどの言語を使用するかというのは偶然の巡り合わせと自らの選択によるものだと思う。私の場合、英語か、それともアラビア語または日本語かという選択が、それぞれの言語やそれに伴う事象からの逃げに起因しては決してならないと強く思う。残りのクウェート生活で臨機応変にバランスよくそれぞれの言語を使い分けていく事ができれば、この留学を通じてアラビア語の取得だけでなく、今後の自らの知識の糧となるものに多く出会えると信じている。